

『団扇絵づくし』

—挿絵と文章の響き合いと、細やかな意匠—

森 暁子

はじめに

絵本『団扇絵づくし』は、菱川師宣が挿絵を付けた版本である。流布本は天和四（1684）年版だが、初版は天和二（1682）年版と考えられ、これはパリ国立図書館のデュレコレクションに所蔵がある¹。

この本は、見開きの右側に団扇、左側に扇を配した、図案集の形式である。団扇も扇も、涼を取る道具として当時欠かせないもので、その地紙にはいろいろな絵が描かれて楽しまれていた。また、その絵を屏風に貼って鑑賞することも行われていた。序には、屏風に貼られた素晴らしい地紙の絵に基づき師宣がアレンジして描いたと、本の成立の経緯が説明されている。しかし、挿絵の上部の本文を見てみると、これは図案についての説明ではなく、単独で読むことのできる、物語的な文章である。どうやらこちらの本文が先に作られ、団扇と扇の図案は、作者の指示によって後から作られたと考えられる。つまり、序文に説明される経緯はフィクションで、この本は単なる図案集ではなく、本文と挿絵から浮かび上がる意味を、知的に読み解いて楽しむ絵本であると考えられる。

ここでは、特に趣向の凝らされているとみえる、最初の見開きの初ウ・一オを例に取り上げ、作品の特徴を探る。初ウについては紋様や事物の匂わす意味を中心に、一オについてはその暗示する古典作品を中心に、それぞれの挿絵と本文を単体で見た場合の解釈と、併せて見た場合の解釈、また、見開きの左右に共通するイメージについても見る。

I 画面右側（初ウ）の世界

本文：男を待つ女

▲きみまつよひのつれつれ草そこはかとよミ給
ひし秋の夜のながくも君をおもふまひそよな
とゝうちうらミたる有さまハなにしおハ、いさ
ことゝはん都とり我おもふ人はありやなしやと
よミし哥のこゝろなるへし

とふ人もあらしふきそふあきはきてこのは
にうつむやとの道芝²

初ウの本文では、秋の夜長の手持ち無沙汰に『徒然草』を読みながら、訪ねてこなくなった恋人を恨んでいる女の風情が、既存の和歌を取り込み語られている。「男に飽きられる女」、「男の訪れを待つ女」という主題は、平安時代の雰囲気の色濃い。また、短い文章だが古典も引用されている。掛詞で引き出

された『徒然草』の書名は知的なイメージを、また、『伊勢物語』の「名にしおはば」と、直接には『新古今和歌集』から取り込んだらしい「とふ人も」の和歌は、想う人に会えない雰囲気醸し出している。

挿絵：秋の夜長の読書

それでは次に、本文の内容は一旦忘れて挿絵に目を転じてみる。

まず、画面中央の若い女は、立て膝に草紙を載せて読んでいる。様々な紋様を散らした豪華な衣装から、裕福な身分の可能性がある。小袖は大きな菊の紋様の柄である。また、同じ灯りの下で、若い女の方を向いて草紙を読んでいる傍らの少女は、侍女と見える。その小袖は桜の紋様を散らした柄である。

次に背景の事物を見てみると、まず、屏風は秋草図である。植物の種類は、葉の形状からある程度特定できる。細長い湾曲した線は薄、三枚ずつの葉が特徴的なのは明らかに萩である。また茎の両横に付く丸みを帯びた葉の表現から桔梗らしいもの、それに細長い葉の重なった表現から撫子らしいものも見える。なお、師宣の描く秋草図屏風で、もう少し明確に植物を描いているものを見てみると、『美人絵づくし』卅九ウでは、芝垣と共に薄、萩、藤袴が描かれており、人物の衣装にも、菊、藤袴、女郎花、桔梗が見える。また『当世早流雛形』十七オにも、薄、萩、藤袴が描かれている。これらと比べてみても、この屏風絵は秋草図と見て支障がない。一目目立たないが複数の秋草が描かれており、女の小袖の菊と調和している。

また、灯りの道具も見える。燭台と蝋燭、横には芯切りと、切った芯を入れると思しい容器がある。蝋燭に火がついていることから、もう絵の中は暗い時間帯であるとわかる。

以上から考えると、この挿絵は、秋の夜長に読書をする女の図である。屏風絵の秋草と女の小袖の菊が、季節が秋であることを匂わせ、また灯りは夜を表しており、読書をして過ごすのに相応しい秋の夜長の雰囲気醸し出している。

画面右側の世界：客を待ちながら禿に講義をする遊女

ところが本文と併せてみると、この挿絵には別の雰囲気が漂ってくる。挿絵の女が本文の物語の女であるなら、読書は来ない男を想いながらしていることで、題名は見えないが、読んでいるのは『徒然草』となる。また、屏風絵や小袖の柄が表すのは「秋」のみならず、本文中に掛詞で出ていた「飽き」、つまり女が「飽き」られた身と暗示しているらしい。すると少女の小袖の桜も、「春」の雰囲気の若々しさだ

けではなく、「秋」＝「飽き」の女との対比にも見える。そして火のともった蠟燭は、本文中の「宵」や「夜」と通ずる。このように、ささやかに描かれた事物も本文の内容と響き合っていることがわかる。

なお、この団扇絵の上下には雲が描かれ、その内側には二重の点線の子持ち枠が付いている。この表現は『団扇絵づくし』に頻出するが、ここに関してみれば、点々を「道芝」の露と見ることもできる³。露は秋の景物である。

それから、物語は平安時代的ではあるが、挿絵に描かれている世界は、『団扇絵づくし』が出版された頃の当世風である。すると、絵の二人は、高貴な身分の女と侍女ではなく、遊女と禿ではないか⁴。当時の遊女には、高い教養が要求された。また、遊女が妹分の禿に芸事や書物の講義をすることもあったと考えられる。また、衣装の華やかさも、遊女ゆえと見て良いだろう。つまりこの図は、来なくなった客の男を想いつつ暇つぶしに『徒然草』を読みながら、禿と同じ箇所を開かせて講義をしている遊女を描いていると見ることができる。

以上のように、本文と共に挿絵を見ることで、単体の団扇絵として見る場合とは違う雰囲気が生ずる。また逆に、挿絵と共に読むことで、本文の物語も遊女の話と理解されると言えよう。本文だけでは、男が飽きて通ってこなくなったのを恨む女の話、また挿絵だけ見れば、秋の夜長に読書をする女の図である。しかし、共に鑑賞することによって両者が響き合い、表されているのは、来ない客を待つ当世の遊女の世界、彼女が禿に講義しつつ読んでいるのは『徒然草』、そして屏風や小袖は「秋」のみならず「飽き」をも示すものとして、にわかに目に見えてくる。

Ⅱ画面左側（一オ）の世界

本文：葛（クズ）の絵の扇に恨みの歌を書き付ける女

▲ものすきな人いつれにつけてかはりたる事をこのミ給ふ扇にかづら花をこのミてわが思ふ人に哥よミてたまはれとてつかはしぬきミまつよひのうたゝねをうらミてかきおくりぬ

うたゝねのあさけの袖にかはる也ならずあふきのあきのはつかせ⁵

一オの本文は、物好きな男がカズラ（つる草）の花を描いた扇を作り、それを題材に歌を詠むよう恋人に頼んだところ、男を恨んでいた女は、暑い夏が過ぎると使われなくなる扇に我が身をなぞらえた和歌を詠んで返した、という話である。この物語も末尾に、「秋」と「飽き」を掛けた既存の和歌を取り込んでいる。また、「絵を見て歌を詠む」、「扇に和歌を書き付ける」などの主題から、これも平安時代の雰囲気を持つ話である。そして、男が扇にあつらえたカズラというのは、「秋」の植物で「うらみ」というので、まず連想されるのは、葛（クズ）である。葛

は「うらみ（裏見／恨み）」と掛けて用いられる。男が葛の花の絵柄の扇をよこしたので、ここぞとばかりに、女が自分の「恨み」を詠んで返したものと理解される。

挿絵：『源氏物語』の夕顔巻の図案

それでは、またここで本文は一旦忘れて、挿絵に目を転じてみる。扇の中心に大きく描かれている花の咲いた植物は、カズラ（つる草）の中でも瓜の一種のようだが、どうやらこれは夕顔で、『源氏物語』の夕顔巻を暗示する絵柄らしい。

夕顔巻には、源氏が、みすぼらしい家の垣根に「いと青やかなる葛（かづら）の心地よげに這ひかかれる」、つまり青々と繁ったつる草の白い花、夕顔に目をとめ、隨身に花を一房折ってこさせようとすると、家の中から出てきた女童が香をたきしめた白い扇を差し出して、「これに載せて（あなたの主人に）差し上げなさい」と言う場面がある。この扇には家の主人たる女の和歌が書き付けてあり、源氏は心惹かれ恋に落ちていく。

この作品は古くから絵画化されてきたが、この場面も画題として取り上げられてきた。夕顔の繁った垣根、その花の一房が載った扇を差し出す女童と、受け取ろうとする隨身、また、垣根の外には、主人公の源氏と、彼の乗ってきた車、それに従者たちが描かれる作例が複数ある⁶。中にはまさに扇絵として描かれたものもあるが、『源氏』の画題は、そのような身近な調度品にも好んで描かれた。近世文学の早い例では、仮名草子『竹斎』に「扇は都俵屋が、源氏の夕顔の巻、絵具をあかせて書きたりけり」とみえる。

また、山本春正の絵入り本を皮切りに、『源氏』や関連した書が挿絵付きで相次いで出版され、このような、いわゆる「源氏絵」は、ますます広く知られるものとなった⁷。そして師宣も、その出版に関わった一人である。『源氏大和絵鑑』という作品の夕顔巻の絵には先述の作例と共通した要素が見て取れるが、これは師宣が絵を描いていることが、刊記から確かである⁸。これを例に挙げるまでもないかもしれないが、当時の画師として、彼も当然源氏絵に精通していたと言える。

さて、『源氏』はこのように絵入りで出版されるに及んで更に広まったわけだが、象徴的な事物を描いて特定の巻を暗示する図案もまた広く知られていく。例えば、その名も『源氏ひながた』という小袖の図案集には、「ませに葛（垣根に絡むツタ）のもやう」というものがある。これは目録に「扇のみか小袖にもはやる友禅染 五条あたりの染屋にある夕がほの模様」と示されており、つまり垣根とカズラの二つだけで夕顔巻を暗示した図柄である。同様に、扇と夕顔の花の二つで夕顔巻を表す作例も、江戸時代の能衣装や菓子型の型などにある⁹。

このような背景から、この単純な扇絵は、実はこれだけで『源氏』の夕顔巻を表しているものと見え

る。団扇ではなく扇の絵であることが肝心で、夕顔の一房が、そのまま女童の差し出した扇に貼りついたような図案になっている。

画面左側の世界：夏の扇に秋／飽きの歌を書き付ける女

さて、本文だけを読んだときは、男があつらえたカズラの花というのは、女が「恨み」の和歌を詠んだところから、葛と考えられた。ところが挿絵と併せて見ると、男があつらえたカズラとは、夕顔ということになる。すると、女は夏の植物の夕顔が夏に使われる扇に描いてあるのを見て、秋になり使われなくなる、つまり、あなたに飽きられ捨てられる、と詠んだものと考えられる。また、女が歌を扇に書き付けたという本文の記述が、挿絵の示す夕顔巻で、扇に歌が書き付けてあったという話と響き合う。もしかしたら男は夕顔巻を考えてこの扇を作らせ、謎かけのつもりで贈ったのかもしれない。そして女が、これは夕顔巻を表したものだ気づきつつも、あえて知らぬふりをして恨みを詠んだのだとすると、そこに面白さがあるのかもしれない。

以上のように、画面左側の場合は、本文のみで読んだ場合は、秋の植物である葛の花の絵の扇に恨みの和歌を書き付ける話、挿絵だけを見た場合は、『源氏』の夕顔巻を示す図案と解釈できるが、併せて鑑賞すると、男があつらえた夏の植物の夕顔の絵の、やはり夏の調度たる扇に、女が、秋になって使われなくなる扇＝飽きられた我が身を示す和歌を書き付ける話であると、別の解釈ができる。

おわりに

このように、画面の左右とも、本文のみで読むことも、挿絵のみで団扇絵や扇絵の図案として楽しむこともできるが、本文と挿絵を併せて鑑賞すると、両者が響き合い、別の解釈が可能になると言える。また、描かれた事物の意味や暗示される古典の効果もあいまって、知的に読み解く楽しさがある。ここから、この『団扇絵づくし』が単なる図案集ではないことが見て取れると言えよう。

なお、見開きの左右を同じ世界の物語と見るとも可能と言える。本文の「君待つ宵」、「我が思う人」、「あき（秋／飽き）」は、左右の画面に共通する言葉である。ここから、左右の物語が、男が通ってこないのを恨む、同じ女の話であると見ると、画面左側の世界も遊女と客の話として読むことができる¹⁰。画面左側の扇が一部右側にはみ出しているところも、左右二つの世界を重ねて読むべきことを暗示しているかのようである。

このように、多様な解釈が可能である点に、この作品の魅力を見ることができると言えるだろう。中にはありふれた画題もあるが、師宣による細やかで美しい描きぶりと、その挿絵と本文との響き合いが、この作品を知的な絵本たらしめていると考えられる

のである。

※本発表は学内の挿絵研究会における発表に基づく。夕顔巻の関わる可能性についてはそでご教示頂いた。

※初ウは『徒然草』の「ひとり灯のもとに文をひろげて見ぬ世の人を友とするぞこよなう慰むわざなる」にも関わるだろうと、パリ第7大学の Daniel STRUVE 氏にご指摘頂いた。

注

- 『天理図書館善本叢書と書之部第六十七巻師宣政信絵本集』（昭和58年3月八木書店）の松平進氏の解題参照。
- 『千五百番歌合』秋四・七五二番右。『新古今和歌集』巻第五・秋歌下所収。
- 例えば『唐長の「京からかみ」文様』（平成15年9月紫紅社）p.99～103の図案に露と芝の関係の深さが窺える。
- 立て膝に草紙の読書図を師宣は複数描いている。『このごろ草』六ウ、『和国百女』四ウ、『美人絵づくし』卅八オ（これは楽を聞く図）は高貴な身分の女だが、遊女の風俗を織り交ぜて描いたと思しい出光美術館蔵「婦女遊戯図」（『原色浮世絵大百科事典第六巻』（昭和57年1月大修館書店））、師宣画とされる『吉原下職原』三ウの高尾の読書図（これは書見台を使用）等の例もあるので、初ウの挿絵の女を遊女と見ても良いだろう。
- 『正治二年初度百首』上・前斎院の百首の内、秋二十首の最初の歌。『新古今和歌集』巻第四・秋歌上所収。
- 『日本の意匠第一巻源氏物語』（昭和58年8月京都書院）所載の「源氏物語扇面色紙貼込帖」（室町時代）、土佐光吉筆「源氏物語色紙貼込帖」（桃山時代、和泉市久保惣美術館蔵）参照。
- 清水婦久子氏「絵入源氏物語」（『源氏物語講座第七巻』（平成4年12月勉誠社））参照。
- 『源氏小鏡』、『源氏鬢鏡』、『おさな源氏』の江戸板の挿絵に師宣の関わる可能性も指摘されている。田辺昌子氏「浮世絵における源氏絵成立の構造」（『国文学』44-5（平成11年4月））参照。
- 『工芸にみる古典文学意匠』（昭和55年3月紫紅社）所載「段に扇子と夕顔文様唐織」（高島屋史料館蔵）、『源氏の意匠』（平成10年4月小学館）所載「青緑茶段青海波扇夕顔模様唐織」（東京国立博物館蔵）、押物製の菓子（虎屋）参照。
- 序が班女の記事に触れているが、夕顔巻を引く謡曲『班女』が遊女の物語なので、一オを遊女の話と見てよさそうである。なお謡曲『夕顔』も班女の記事を引いている。

参考文献

- 長友千代治氏「江戸美人の読書」（『文読む姿の西東』（平成19年12月慶應義塾大学出版会））
 竹内順一氏「源氏物語と工芸」（『源氏物語講座第七巻』）
 片桐弥生氏「美術史における源氏物語」（『源氏物語研究集成第十四巻』（平成12年6月風間書房））